



シマクトゥバを知るための10冊

狩俣 繁久・選

(琉球大学名誉教授)

1. 『奄美方言分類辞典』(上下巻) 長田須磨・須山名保子編 (1977、笠間書院)

奄美大島大和村の人々がどんな社会生活を送ってきたかが辞典形式で記録されている。身体、人間関係、衣、食、住等の意味分野別に単語が並ぶ。シマの暮らしを丸ごと記述したかのような営為は圧倒的である。



奄美方言分類辞典

2. 『どうなんむぬい辞典』与那国方言辞典編集委員会編 (2019、与那国町役場)

話者が減り、消滅の危機にあるどうなんむぬい(与那国言葉)を後世に引き継ごうと製作された。単語の使い方を示すだけでなく、例文が生活文化の記述になっており、シマの生活文化を記録した優れた辞書である。



どうなんむぬい辞典

3. 『沖縄・宮古のことわざ』 佐渡山正吉 (1988、ひるぎ社)

ミャークフツ(宮古言葉)で語り継がれてきたことわざに新たな命を与えた一冊。先人の知恵やいつの世も変わらぬ親子の情愛が描かれている。時代を担う若者への指針として読み直せば新しい発見があるだろう。



沖縄・宮古のことわざ

4. 『琉球語の美しさ』 仲宗根政善 (1995、ロマン書房)

『沖縄今帰仁方言辞典』の著者である仲宗根政善によるシマクトゥバのもうひとつの姿が綴られている。母への思慕やことばを通して想起される故郷の風景など、宝物のような情景にシマクトゥバを通してふれることができる。



琉球語の美しさ

5. 『うちなあぐちフィーリング』 儀間進 (1987、沖繩タイムス社)

「沖繩口の持っている語感、味わい、共通語と沖繩口とのずれ、言葉と言葉の間にあるゆれ」など、シマクトゥバにまつわる軽妙かつ含蓄のある文章が並ぶ。ことばの味わいまでも知ることができる入門書の決定版。



うちなあぐちフィーリング

6. 『沖繩口試訳 蜻蛉日記 上の一』 儀間進 (1981、自費出版)

平安中期の女流歌人である藤原道綱母によって書かれた『蜻蛉日記』を儀間進がシマクトゥバに訳したものである。大きなチャレンジに立ち向かった儀間の姿が優れた翻訳者たちの姿と重なる。



沖繩口試訳
蜻蛉日記 上の一

7. 『語てい遊ばなシマクトゥバ 続々うちなあぐちフィーリング』 儀間進 (2000、沖繩タイムス社)

シマクトゥバの単語や表現の意味、ニュアンスなどを使用される場面の中で分かりやすく解説している。言語活動とは、話し手と聞き手の共同作業により生み出されるという本質を見抜いた優れた入門書である。



語てい遊ばなシマクトゥバ
続々うちなあぐちフィーリング

8. 『とっばらーま歌集』 「とっばらーま歌集」編集委員会編 (1986、石垣市)

八重山を代表する抒情歌であるトゥバラーマは、折々の心情をメロディーに乗せて即興的に歌いあげたものである。この歌集には古典的なトゥバラーマだけでなく、戦後に創作されたトゥバラーマも掲載されている。



とっばらーま歌集

9. 『島言葉対訳詩集 昔沖繩泣き笑い』 下門次男 (2016、Ryukyu 企画)

西原町小那覇出身の著者による詩集。沖繩戦と米軍支配時の沖繩を描いた「戦場ぬ哀り」やシマの風俗を描いた「出生祝 (んばぎーすーじ)」「茶毘」などの45首が収められている。ウナファクトゥバ (小那覇言葉) の詩と日本語の詩が対になってハーモニーをなす。



島言葉対訳詩集
昔沖繩泣き笑い

10. 『下地勇 10 周年ベスト “静”+“動”』 下地勇 (2021、テイチクエンタテインメント)

宮古島出身のシンガーソングライターである下地勇によるCD。マークフツ (宮古言葉) で書いた詩に曲をつけた36曲が収録されている。マークフツのリズムと楽曲のリズムに身を任せてマークフツの世界を歩き回るのも楽しい。



下地勇 10 周年ベスト “静”+“動”